

植民地郷愁を撃て:
小林勝「「懐しい」と言ってはならぬ」と「日本人
中学校」

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-08-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.24517/00062999 |

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



植民地郷愁を撃て*

——小林勝「『懐しい』と言ってはならぬ」と「日本人中学校」——



原佑介 (立命館大学衣笠総合研究機構
専門研究員)

キーワード: 小林勝, 引揚者, 戦後文学, 朝鮮, 植民地主義

Key words : KOBAYASHI Masaru, repatriate, postwar literature, Korea, colonialism

かれの愛はかれの権力とびったり一体になっていた。それは支配する者がみずからの権力を保持しつづけながら、その範囲のなかで支配される者にそそぐ愛だった¹⁾。

1. はじめに——「私の小さな歴史のはじまり」

植民地朝鮮で生まれ育った小林勝が生前最後に発表したのは、「『懐しい』と言ってはならぬ」(1971)というタイトルの短いエッセイであった。このタイトルは、かれの文学の集約的メッセージと受け取ることもできるが、植民地をなつかしく思う気持ちとどう向き合うかは、多くのいわゆる引揚者の戦後文学に共通するテーマでもあった。関東州で生まれ育った藤森節子の回想記『少女たちの植民地』の巻末解説のなかで、林淑美は、植民者二世たちの引揚げ後の人生についてこう述べる。「植民地生れの郷愁というのは、植民地後のながい時間、文化的にも心情的にも祖国との軋みを感じながら、ふる里への郷愁にさえ罪の意識を感じながら、ふる里への限らない懐かしさに歯をく

いしばって生きることなのだ²⁾。」この言葉に導かれて藤森の回想記を読んでもみると、そのなかに小林勝の名前が出てくる。

他国の人々の、まさに血と脂汗の上に築かれた生活は、個々の人間が中国人にどう対したかを問う以前に、存在そのものが罪であることに気づくのは後になってからだ。それを思うと心が震えだすのだが、もう取り返しはつかない。

そのうえでそれでもなお、私がある地で育ったことは事実であり、私の小さな歴史のはじまりは、そこにしかないのだ。朝鮮で育った作家小林勝は「懐かしい」ということを自らに徹底的に禁じることで、我が身を切り刻んだのだったが、それはあまりにも痛ましいやり方だった³⁾。

日本の敗戦当時、帝国日本の植民地や勢力圏、各地の戦域には、当時の「内地人」人口の1割に迫る700万人近くの日本人がいた。そのうちの約半数が民間人だったが、そこには植民地で生まれた(育った)子供たちが多数含まれていた。それぞれの「小さな歴史のはじまり」が植民地にあった日本人たちである。藤森の述懐にあらわれているとおり、戦後日本でそのことに苦悩した者は少なかつた。小林勝はそのうちの一人であり、文学活動のほとんど全精力を、日本による朝鮮植民地支配を批判することに注いだ稀有な日本文学者

であった。

まず、小林勝の生涯を簡単に紹介しておきたい。1927年に朝鮮半島の南端に近い晋州で生まれた小林勝は、同じ慶尚道の安東や大邱で育った。長野県出身の父親は農林学校の教師であった。中学校を4年で早期修了した後、1944年春からは、埼玉県の陸軍予科士官学校、陸軍航空士官学校で訓練生活を送ったが、特攻隊員になる前に日本の敗戦を迎えた。

1948年、日本共産党に入党。翌年に早稲田大学に転入学するも、50年のレッドパージ反対運動で退学処分を受ける。1952年6月25日、党の「武装闘争」方針にしたがった小林勝は、新宿の朝鮮戦争反対デモで火焰燵を投げ、現行犯逮捕された。警視庁の留置場でかれは、自分を「同務」と呼ぶ朝鮮人共産主義者たちが戦争中の大韓民国に強制送還されていく場に立ち会い、大きな衝撃を受ける。このとき感じた「ふるえだすような憤怒」は、かれの文学の原点であり、その後死に至るまでかれに朝鮮のことを書かせつづける原動力となったという。

1953年1月の保釈後、本格的に文学活動を開始するが、59年7月、朝鮮戦争時の「火焰燵事件」の有罪判決が確定し、半年間獄中生活を送る。64年、肺結核を発症（遺族によれば、ツベルクリン反応検査ではじめて陽性の結果が出たのは、かれが「火焰燵事件」のために獄中にあった52年冬のことであった）。右肺の大部分を切除し、長い闘病生活を余儀なくされる。復帰後、「日本および日本人にとって、朝鮮および朝鮮人とは何か」を問う作品群を、命を削るようにして書いていくが、残された時間は短く、1971年に43歳で病死した。

小林勝の文学の重要性に対しては、日本人よりも在日朝鮮人のほうが鋭敏だったように思われる。かれが死んだとき、多くの在日朝鮮人が深い喪失感と哀悼の意を表明した。小説家の李振成は、「何よりも心をうたれたのは、朝鮮ないしは朝鮮人にたいするその真摯にして誠実な追求である。日本人としての主体に立って、文学的にかく不問に付されがちな、精々題材的にあつかわれがちな

朝鮮・朝鮮人を真向うから正眼に構えてひたむきに追究しているその姿である」と述べ⁷⁾、小林勝の死後にかれの最後の小説集（『朝鮮・明治五十二年』1971）を世に送り出した新興出版社の朴元俊は、「もちろん朝鮮および朝鮮人をテーマにして作品を書いている作家がほかにないわけではない。だが、真実生涯をかけて、ひと筋に朝鮮および朝鮮人をテーマにして、情熱を傾け、その情熱を死に至るまでともしつづけた作家はほかにいない」と明言した⁸⁾。晩年の小林勝を知る愛沢革は、「これらの在日朝鮮人の小林勝への哀悼——というよりはあたかも同志の一人を失ったかのような痛恨の言葉を見ると、この作家の苦しみや楽しみ・悲喜劇を最も深いところで理解し吸収していた読者は彼らではなかったか、と私は今考え始めている」との感想を漏らしている⁹⁾。

小林勝のなにかが、その「苦しみや楽しみ・悲喜劇」を在日朝鮮人たちと共有させたのか。この問いから出発し、本稿では、小林勝のなかで朝鮮に対する郷愁と戦後のな罪悪感がどのようにせめぎ合っていたかに焦点をあてることを通じて、かれの文学が目指していた地平がどのようなものだったのかを考えたい。おもなテキストとしては、エッセイ「「懐しい」と言ってはならぬ」と、そのなかで反省的に解説されている短編小説「日本人中学校」（1957）を取り上げる。

2. 「べったり」と「断絶」

渡邊一民によれば、小林勝の晩年にあたる1970年ごろは、「日本で育ち日本の植民地政策ゆえに母語を奪われた在日朝鮮人作家の作品が一斉に開花したばかりか、敗戦で引揚げてきた植民地二世の作家がほとんど同時に作品を書きだした、近代日本の文学史上画期的な意味をもつ時代であった¹⁰⁾。」この時期、金鶴泳が1966年に文藝賞（「凍える口」）、李振成が69年に群像新人文賞（「またふたたびの道」）を受賞するなど、新しい世代の在日朝鮮人文学者が次々と頭角をあらわす。崔真

碩は、72年に李恢成「砧をうつ女」と東峰夫「オキナワの少年」が芥川賞を同時に受賞したことを踏まえ、「元来、日本文壇の在り方は日本ナショナリズムの動きと連動していて、植民地帝国時代から一貫してそうですが、日本文壇はスランプに陥ったり、日本ナショナリズムが再編されるとき、植民地文学を発見します」と指摘する⁸⁾。東峰夫に先んじて大城立裕が沖縄出身者ではじめて芥川賞を受賞したのは、1967年のことであった（「カクテル・パーティー」）。同じ時期に、大連生まれの清岡卓行（「アカシアの大連」1969）、同じく大連で幼少期をすごした三木卓（「鶴」1972）、朝鮮で少年期をすごした日野啓三（「あの夕陽」1974）といった引揚者作家が、相次いで芥川賞を受賞している⁹⁾。闘病生活から復帰した小林勝が最後の光芒を放ったのは、このような「植民地文学」の「発見」の時代でもあった。この時期かれは、植民者二世の朝鮮に対するコンプレックスを描いた「蹄の割れたもの」（1969）や、3・1独立運動を活写した「万歳・明治五十二年」（1969）など、重要な作品を書き残している。1970年前後は、ポストコロニアル日本語文学とでも呼ぶべき一群の文学作品が続出した特別な競演の時代であった。

戦後日本の文学史を振り返ってみてわかるのは、小林勝のような日本人引揚者にしろ在日朝鮮人にしろ、日本の植民地主義の問題を主題化した日本語文学のおもな担い手は二世世代だった、ということである。在日朝鮮人では、解放後第一世代である金達寿（1919～1997）や許南麒（1918～1988）よりも下の世代に属する金石範（1925～）や金時鐘（1929～）、高史明（1932～）、李恢成（1935～）らが、1970年前後に登場してくる。一方、かれらと同世代の植民地朝鮮生まれの日本人には、小林勝のほか、村松武司（1924～1993）や森崎和江（1927～）、梶山季之（1930～1975）、後藤明生（1932～1999）、五木寛之（1932～、生後まもなく朝鮮に移住）らがいる。戦後日本文学がなによりもまず戦争や敗戦後の状況を主題とする文学として出発したのに対し、つづく世代の文学者のなかには、植民地での生活を主題とする者も多数いた。

ポストコロニアル日本語文学の中核を成したのは、戦争や植民地支配、あるいはそれに抵抗する民族解放闘争や独立運動に本格的に関わる前に1945年8月を迎えることになった、「遅れてきた青年」（大江健三郎）たちだったといえる。

さて、この時期の日本人引揚者や在日朝鮮人の文学作品をみると、植民地支配の歴史に関する記憶や考え方が、ぶつかり合ったりきしみ合ったり、ときには響き合ったりしていたことを示す痕跡が、さまざまな形で残っていることが浮かび上がってくる。たとえば金石範は、一人称小説「虚無譚」（1969）のなかで、戦後日本に暮らす在日朝鮮人と旧在朝日本人の対話を通して、「故郷」朝鮮をめぐるかれらの認識のすれちがいを浮き彫りにしている。

少年期を植民地朝鮮ですごした日本人ジャーナリストのFは、思いやみがたく、朝鮮の言葉や文化に好んで触れる「心情派」であった。しかし、語り手の在日朝鮮人にはむしろ、失われた「故郷」に思いを寄せるFの「そのべつたりがひっかかる」。

Fの説明はこうである。「だいいちぼくは故郷がないでしょう。分りますかね、日本なんてぼくの故郷じゃないんだ。もちろん国ではあるけれどね。いまのぼくの中に住んでいる青少年時代の、そのFの手足をのばしてやるところが日本にはない。ぼくが小学や中学の時分をすごした坂道や赤土の切通しのあるソウルが故郷でないとしたら、ぼくはどうすればいいだろう。それが否定されたとすると、ぼくは過去を持ってない人間同様ってことになりますよ」。これに対して口をついて出そうになったつぎのような嫌味を、語り手は思いとどまっただのみこむ——「しかし、朝鮮はFやコロンの息子の過去のためにあるわけじゃない」。

そのかわりにかれは、「分るなあ、それはだれも否定なんかできはしない。それが昔の支配者たちの懐古趣味でもないかぎりはね」と痛烈な皮肉を忍ばせながらも、ひとまず穏当にこう答えておく。「しかしそうなれば、私の場合なんかはどうなるんだろう。Fさんとは対照的だ。Fさんに過去がないとすれば、日本で育った私や、在日朝鮮人にもそ

の意味では過去がないということになる。というのは、Fさんは朝鮮に故郷があると感じ、私は日本に故郷があると感じられないから——。私は私の中にいっぱいであるはずの日本にべったりできない。Fさんは朝鮮を愛するといい、朝鮮はわが魂と呼び、私は日本を愛すると確信をもっていないこの屈折した心情はどう説明すればよいのか……」〔ルビママ〕

旧在朝日本人は朝鮮が故郷だと感じるのに対して、在日朝鮮人は「日本にべったりできない」——戦後日本に持ち越されたこの重大な非対称を、在日朝鮮人の前でFは重く受け止めるべきであった。「それじゃお互いのコミュニケーションはどうなります？ そこには断絶の意識しかないんじゃないですか」と反論するFに向かって、我が意を得たりとばかりに語り手は即答する。「そう、コミュニケーションは後から生れますよ。その断絶をお互いにもっと意識せよということなんだな。もっと断絶せよと、いや、断絶しようと私はいたい¹⁰⁾」。

語り手は、「故郷」朝鮮に心情の次元で「べったり」くつつこうとする植民者二世に向かって、「コミュニケーション」なんかいらぬ、むしろ「断絶しよう」とやんわりと提案する。しかし、この無難な物言いの底では、「かつて朝鮮は日本のものだった」という観念を当然視する戦後日本人たちに対する激しい憤りが煮えたぎっていた。主人公の在日朝鮮人にとって、Fのノスタルジアと「国際法上は当時の朝鮮は日本だった」といった帝国主義礼讃史観は大差ないものであった。

ところで、日本人と朝鮮人のあいだに深々と横たわる「断絶」こそが、小林勝の文学の最大のテーマだったといえる。かれの文学活動は、Fと同じ「コロンの息子」、そして自分たちがかつて朝鮮の所有者だったという観念を手放そうとしない戦後日本人の側から、この「断絶」をみつめようとするものであった。小林勝もFも、生まれ育った朝鮮を戦後も愛しつづけた点では同じだが、この「断絶」に対する感覚が決定的に異なっていたと思われる。ここで参考にしたのが、小林勝の文学の

特質をまとめた磯貝治良のつぎのような指摘である。

一つは、植民地下にあって民族をうばわれた朝鮮人がそれをうばいかえし、朝鮮人に帰るということが、日本人を拒否することと同時に、同意味であったということです。二つには、朝鮮人と日本人のあいだによこたわる深淵が拒否と被拒否という対極の関係で成りたつほかないものであった事実をあぶりだしていることです。そして三つ目には、拒否されることで日本人の貌が照射されてくるということだとおもいます。〔……〕小林勝の文学が朝鮮体験と執拗にからみつづけたのは、朝鮮人によって拒否されるというかたちで見られている存在としての日本人——その日本人とは何であるのかを考えることだったろうとおもいます¹¹⁾。〔ルビ原文〕

失われた「故郷」をなつかしむ自分語り——自己陶醉、あるいはある種の自己憐憫にさえ近い感情にふけるFには、そのかれをみつめ、きっぱりと「拒否」している朝鮮人の姿はまるでみえていなかった。Fの話を書く朝鮮人が苛立ったのはそのためであろう。

これに関連することだが、満洲で少年期をすごした安部公房(1924～1993)は、「故郷に準ずる町」だという奉天(現在の中国瀋陽市)について、こんなことを述べている。「支配民族の特徴はたとえばいま日本にいるアメリカ人であるが、その土地の人間を人間としてよりも、植物や風景のように見るということだ。つまり土地の人間は風物の一部なのである。よほどながく暮らしていても、この事情はなかなか変らない。これは相手を見失うばかりでなく、同時に自分をも見失っているのだが、その点にはめったに気づこうとしないのだから、やっかいだ。植民地を故郷だということは絶対できない¹²⁾」。

朝鮮に「べったり」くつつこうとしていた金石範の小説中のFは、目の前の朝鮮人を見失うこと

によって、「同時に自分をも見失っている」状態にあった。これに対して、「『懐しい』と言ってはならぬ」という言明に結実していく小林勝の文学活動は、磯貝のいう「朝鮮人によって拒否されるというかたちで見られている存在としての日本人」——朝鮮人を見失うことで「同時に自分をも見失っている」状態にある日本人を内在的に問題化しようとするところみだったといえる。

3. 植民者の息子たちの闇

右肺をほぼ全部切除した上、血清肝炎と重度のアルコール中毒にもかかっていた小林勝に残された時間は短く、かれは1971年3月に、最後は腸閉塞で死亡する。前述のとおり、エッセイ「『懐しい』と言ってはならぬ」は、かれの生前最後の刊行物となった。そのなかで小林勝は、自分がなぜ朝鮮への郷愁を拒否しなければならないのか、その理由の一端を、自身の短編小説「日本人中学校」を解説しながら明かしている。かれは、「つい最近、自分の書いたこの小説そのものが、言いようのない衝撃をもって私の心を撃つこととなるある出来事」について語る¹⁵⁾。

エッセイの冒頭で小林勝は、自分の小説は作者の植民地朝鮮での実体験に直接的に即して書かれていると考える読者がいるが、それは誤解であり、ほとんどの登場人物や設定は想像力の産物である、と断った上で、若干の例外として、小説「日本人中学校」を挙げる。この作品は、実体験と見聞を直接の素材にして書いたものだということである。題名の「日本人中学校」とは、小林勝が通っていた大邱中学校のことである¹⁶⁾。かれが在籍していたころの生徒数はおよそ600人、うち朝鮮人は20人ほどであったという¹⁷⁾。

慶尚北道の中心都市大邱は、「京城」と釜山をつなぐ京釜鉄道の中継地点に位置する交通の要衝であった。歩兵第80連隊が駐屯する軍事都市でもあり、大邱中学校にも軍人の子弟が多数通っていた。4月18日は連隊の「軍旗拝受記念日」に定められ、

毎年「軍旗祭」が催されていた。大邱生まれの森崎和江はこう振り返る。「軍旗祭は天皇陛下から賜った軍旗を祝して行う聯隊の祭りで、一般人もこの日聯隊の中に入ることができた。聯隊は一種の聖域だった。日本人の男が成人となった日、徴兵検査で選ばれて兵士となって、はじめて門をくぐることができる。当時の感情ではこの門をくぐるのは晴れがましい成人の儀式だった。特権であった¹⁸⁾。」

大邱中学校の敷地は、連隊駐屯地と鉄条網を隔てて隣接しており、1921年の学校創立当初から、軍事教練や野外演習の際に指導、支援を受けるなど、連隊の強い影響下にあった。日本の敗戦後、連隊駐屯地跡には米軍が駐留し、同区画内にあった中学校も朝鮮戦争時に米軍に接収された。朝鮮戦争勃発直後の1950年7月には、当時日本占領を担当していた米軍第8軍の司令部が、横浜税関庁舎から大邱中学校に一時的に移った。小林勝が通った大邱中学校と陸軍航空士官学校（日本の敗戦後米軍に接収され、ジョンソン基地と改名）は、ともに朝鮮戦争時の米軍の重要拠点として利用されたことになる。

大邱中学校は、学校軍事教練では朝鮮全土の中学校中随一との定評があり、軍事主義の気風が非常に強かった¹⁹⁾。小林勝は、ある小説のなかで、当時の校内の様子をこう描写する。「慶尚北道にただ一つある日本人中学は、粗暴な校風で、腕力が生徒間のモラルであった。上級生の下級生に対する暴力沙汰を学校は黙認していた。それは同じクラスの中でも同様であった。学問の出来のよい者でも腕力に自信のない者はびくびくして過し、獐猛で薄よごれた者たちがやくざまがいの猫背でのしあっていた²⁰⁾。」また、小林勝の2学年下で、大邱中学校の寄宿舎に起居したことのある小説家の日野啓三は、そこでの生活を「軍隊の兵営生活の滑稽な縮小版」と表現し、「二週間毎の土曜の夜中には、消灯後、舎監室から最も遠い二階の隅の部屋に下級生全員が集められ、明りを消した暗やみの中で、勝手な理由をつけて下級生のほぼ全員が殴打される」などと当時を振り返っている²¹⁾。

軍との密接な関係は、日本人社会の戦争熱が高まるにつれていっそう強まっていき、軍関係の学校に進むことが盛んに奨励されるようになった。1940年入学の小林勝は第21期生(45年3月卒業)にあたるが、この代は入学者数に対する卒業者数の比率が歴代でもっとも低く、正規5年課程を修了した者は4割に満たなかった。戦争末期、多くの生徒が早期修了で軍関係の学校に進んでいったが、小林勝もその一人であった。小説「日本人中学校」の舞台は、以上のような背景をもつ大邱中学校である。

物語は、冷たい雨の降る5月のある日、若い英語教師が赴任してくるところからはじまる。講堂でかれをはじめてみた3年生の五郎の目に、容姿端麗で服の着こなしもよく、青年らしい生気に満ちたその男は、国民服に坊主頭で一様に疲れた顔つきをしているほかの教師たちのあいだで際立ってさわやかに映る。

「はくは、この春、東京高等師範学校を卒業した梅原健太です……」と、新任教師が苗字を発音したときの東京訛りの巻き舌に、朝鮮生まれの五郎は敏感に反応し、東京へのあこがれをかき立てられる。英語が堪能で講義も上手にこなす梅原健太は、まもなく生徒たちの人気を集めるようになる。東京での自由で新鮮な学生時代の話が、植民地の日本人生徒たちを虜にする。きびしくはあったが、ほかの教師たちとちがってけっして生徒を殴らなかつた。また、バレーボールが得意な梅原健太は、いったん外に出るとたちまち兄のようになり、生徒たちとともにボールを追いかけて汗を流した。そのように浚刺と新生活をはじめた梅原健太だったが、いつしかある疑惑が生徒たちのあいだに流れるようになる。

——梅原先生な……朝鮮人だっていうと……

その言葉を聞いた時、五郎は、冷たい鉛の拳が彼の柔らかな心臓を叩いたのを感じた。彼は杳然とし、それから辛うじて相手に言った。

——誰が言ったの、そんなひどいこと……
(ひどいこと、五郎にとっては、真実そうだった) ²⁰⁾

それ以降、日本人生徒たちが生徒である前に植民地支配者だということが露呈していく。教室全体に悪意を含んだ不穏な空気が立ちこめるなか、五郎は講義している梅原健太の姿をまじまじと観察する。すると不思議なことに、江戸っ子の証だと信じこんでいたその洗練された髪型や綺麗な歯、さらにはあの巻き舌さえも、ことごとく朝鮮人の特徴のように思えてくるのであった。

夏休みの迫ったある日、ついに生徒の一人が証拠をつかむ。松林のなかで相撲をとっていた梅原健太が脱いだ洋服を調べたところ、「崔」という文字が書いてあった、というのである。この話が、校内の「いたる所で溜息や怒り声や笑い声を起させた」²¹⁾。

小中学校時代を朝鮮ですごした田中明は、1926年生まれで小林勝とほぼ同年代だったが、この小説を読んだとき、「同じころ京城(現ソウル)で日本人中学校に通っていた私は、共犯者のように心穏やかでないものがあつた」と打ち明けている²²⁾。小林勝の「日本人中学校」は、植民者の息子たちが一人の朝鮮人に対して犯した罪の物語であつた。

4. 「はくが、君たちに、何かしたかね……」

植民地期を生きぬいた多くの朝鮮人の過去は、解放後のきびしい政治情勢のなかで、荒涼とした沈黙のなかに沈みこんでいった。冷戦の最前線に置かれた韓国において、それは日本よりもはるかに強固に凍てついた沈黙であつた。1957年に日本で発表された小説「日本人中学校」は、作者である小林勝の意図を越えて、葬り去られた膨大な量の朝鮮人の過去のうち、ある一人の男の過去にほのかな光をあてる証言ともなつた。その男、つまり作中の梅原健太のモデルとなつたのは、そのお

よそ40年後に大韓民国大統領となる崔圭夏——
当時の日本名、梅原圭一であった。

ここで崔圭夏の略歴を紹介しておきたい。崔圭夏は、1919年7月、江原道原州の零落した両班の家に生まれた。普通学校のころから、休み時間もほとんど遊ばずに本を熱心に読み、「勉強の虫」と呼ばれるような子供だったという²³⁾。1932年、京城第一公立高等普通学校に入学。少年時代からの勤勉ぶりは一貫しており、物静かで勉強熱心な模範生であった²⁴⁾。とりわけ英語に並外れた才能を発揮した。京城帝国大学に合格するが、家運が傾いていた折だったため、経済的に敷居が低い東京高等師範学校を選択。37年、同校英文科に入学。父親が亡くなって経済事情がさらに悪化するも、母親がみずから畑を耕したり家畜を売ったりして送金をつづけ、本人もしばしば差別に遭いながら外国語の翻訳や家庭教師をして糊口をしのいだという²⁵⁾。

1941年3月、東京高等師範学校を卒業。同校の出身者は植民地朝鮮の中学校教育において大きな比重を占めていたが、崔圭夏はその恩恵をこうむり、大邱中学校に教諭職を得た²⁶⁾。朝鮮総督府は難色を示したが、東京高等師範学校と大邱中学校が強く働きかけた結果、かれの日本人中学校への赴任が実現したという。しかし、大邱中学校での教員生活は長くはつづかず、わずか1年半で辞職。崔圭夏はこの時点で、大邱を離れるだけでなく、教職自体を放擲し、進路を大きく転換させる。42年10月、満洲に渡り、大同学院に入学。今度は政治行政学を専攻した。43年7月に卒業し、解放までの2年間は、満洲国の官吏として働いていたようである²⁷⁾。

朝鮮の解放後はソウル師範大学で一時教鞭をとったが、1946年4月からアメリカ軍政庁中央食糧行政庁に職場を移す。英語力を買われ、51年には外務部通商局長に抜擢されるが、以後は長く外務部で活躍した。67年に長官にまで昇りつめた後、堅実な行政手腕と政治的野心のなさが評価されたのか、75年、國務総理に就任した。

1979年10月26日、20年近く独裁政權を運営し

てきた朴正熙が、側近に暗殺される。これを受け崔圭夏は、大統領代行を経て、同年12月6日に繰り上がる形で大統領に推戴された。しかし、就任直後の12月12日、全斗煥を首魁とする「新軍部」勢力がクーデターを起こす。これによって崔圭夏は権力の中枢から放逐され、わずか8カ月で退位することとなった。朴正熙暗殺とそれにつづく全斗煥らのクーデター、1980年の光州事件といった韓国政治史の重大局面に立ち会ったが、歴史の逆行を止めることができなかつたとされる。「崔大統領は官吏として几帳面で慎重かつ温厚な能吏だった。しかし細心すぎて、決断力に欠け小心翼翼で、現実追従タイプとの批判もあった」との評価が一般的であろうか²⁸⁾。

勤勉で篤実な人柄や質素な暮らしぶりは一貫しており、外務部長官や國務総理を務めた時期も家政婦を雇うこともせず、食卓はいつもつつましいものだったという²⁹⁾。大統領になっても態度は変わらず、秘書官がおどろくほど儉素な生活をつづけ、私邸も平凡な小さな家であった³⁰⁾。非常時に大統領職を務めることになったが、「私のような者に誰が銃を向けるというんだ」と、警護を迷惑がったという³¹⁾。実直な能吏タイプであったかれが専制君主にもたとえられた大韓民国大統領になったのは、運命のいたずらだったといえるかもしれない。

1917年生まれ、朴正熙と同世代である。両者とも師範学校からキャリアを築きはじめ、しばしの教員生活の後、満洲に活路を求めた。これは、帝国秩序の内側で志をとげようとする朝鮮の若者がたどるひとつの典型的な道であった³²⁾。満洲で軍官学校に入学して軍人の道を選んだ朴正熙は61歳で非業の死をとげるが、崔圭夏は長寿を全うし、2006年まで生きた。

小説「日本人中学校」の新任英語教師梅原健太のモデルとなったのは、後にこのような人生を歩むことになる崔圭夏である。稲葉継雄は、大邱中学校の同窓会誌に載った証言を引用しながら、梅原圭一と名乗っていた当時の崔圭夏についてつぎのように書いているが、小林勝の小説にあらわれ

る梅原健太の人物像と完全に符合する。「崔圭夏(梅原圭一)は、「東京高師を卒業したばかりの一番若い英語教師で、白せき長身、在学中に高分までパスし、またスポーツではバレーボールに乗馬に行くとして可ならざるは無い状態で、またたく間に生徒の信望を集めていた」が、やはり民族間の壁は厚く、一九四二年の二学期開始早々、教壇を離れることになった。一〇月二二日、生徒の見送りを受けて大邱から新京へ向かい、満州国官吏となったのである³⁵⁾。〔ルビ原文〕

それでは、小説の展開をみていくことにしよう。日本人よりも日本人らしくみえた梅原健太がじつは朝鮮人だったという噂が流れ、日本人生徒たちのあいだで失望とも怒りとも狂喜ともつかない興奮が爆発する。梅原健太の授業を待つあいだ、教室は異様な活気につつまれる。だれかが窓のカーテンをひきちぎり、また別のだれかがどこかからがらくたの土瓶と茶碗をもちこみ、それらで教卓を装飾する。ある者が黒板に「講談 新・鴨緑江節 一龍崔貞山」と大きな文字で書き、「崔」の字の横に二重丸をつける³⁶⁾。残忍な熱気のこもる静まりかえった教室に、いつものように軽快な足どりで梅原健太が入ってくる。かれは教室の異変にすぐに気づき、顔色を変える。

この後ほんの数秒間だけ、普段は明朗でおだやかな梅原健太が激昂するのを生徒たちは目のあたりにする。梅原健太は、土瓶と茶碗をつかんで窓の外に放り投げ、カーテンに覆われた教卓を荒々しく蹴倒し、狂乱したように両手で黒板の文字を消す。小林勝は、エッセイのなかでこのときのことをこう説明する。「目撃者(それは、そう書くのは実につらいのであるが、戦死した私の兄なのである)の語ったところによると、崔氏はそのまま黒板にむいたまま、じっと立っていたそうである³⁷⁾。」小説では、つづく梅原健太の姿をつぎのように描写している。

そのまま、どれくらい時間がたったんだろう、彼は、ゆるゆると、みんなの方へ向きなおった。彼の髪は額に落ちかかっていた。そ

して髪も顔も、青い洋服も、赤いネクタイも、チョークの粉と埃ですっかり汚れていた。ネクタイはゆがんでいた。彼の顔は青かった、彼の唇も血の気がなかった。彼の眼は放心したように見開かれていた、両手をだらっとさげたままだった。ようやく彼は、低い、震える声で、こう言った。——ほくが、君たちに、何かしたかね……³⁸⁾

なおしばらく生徒たちをみていた梅原健太は、やがて正気をとり戻したように口元をひきしめ、チョークまみれの両手をはたき、洋服についた粉を払い落とした。ネクタイのゆがみをなおしてから、かれは毅然と顔を上げ、静まりかえった教室を後にした。そうして、学校は夏休みに入る。

休み明けの校庭の朝礼で、五郎たちは校長の訓辞を聞く。地味な風采の老人をうしろにしたがえた校長は、事務的な態度で、梅原健太が「一身上の都合によって」辞任したことを告知し、その老人を後任として紹介する。前に立っている生徒が振り向いて、五郎にささやく。「梅原先生な、満州かシナへ行ってしまったんだって……」³⁹⁾

梅原健太が姿を消し、かわりに別の教師があらわれたほかは、中学校はなにも変わっていなかった。こうして、寒々しい空気につつまれながら、物語はおわる。この小説は、梅原健太のモデルとなった梅原圭一が、1942年秋に大邱を去った後どのような運命をたどったのか、小林勝がまだ知らなかった1957年に発表された。

5. 30年後の衝撃

池東旭は、崔圭夏の植民地期の足どりをまとめるなかで、つぎのように書いている。「帰国後、一時教鞭をとったが、すぐ辞めて四三年、満州官吏養成機関の大同学院に入学した。東京高等師範を卒業した彼がなぜ教壇から離れ、満州まで行ったのか不明だ⁴⁰⁾。」

ここまで、小林勝の小説を手がかりにして、こ

の「不明」の部分に光をあてることをこころみてきた。崔圭夏本人が黙して語らず、詳細な評伝も存在しない現状では、かれが満洲に旅立ったのは小林勝が小説に書いた日本人生徒たちによる侮辱事件のせいだ、と断定はできないかもしれない。ただ、仮にそれが最大の要因でなかったとしても、この事件が、崔圭夏が教職をも捨てる大きなきっかけとなったことは、十分にありえるだろう。事件の現場に居合わせたのは小林勝の2歳上の次兄だったが、1940年入学のかれ自身も、41年に赴任してきた梅原圭一の姿は直接みていたはずである。当時の教員数は20名ほどであり、なんらかの関わりはあったかもしれない。

1942年の秋、梅原圭一は、生徒たちの見送りを受けて満洲へと旅立った。「内地」はもちろんのこと、祖国朝鮮でさえ望みはないと悟ったのだろうか。みずからの民族的尊厳に対する植民者の息子たちの罵詈雑言によって大邱中学校での記憶がすでに穢されていたそのとき、生徒たちによる歓送の光景は、かれにとってどれほど寒々しいものだったのだろうか。

「最初から、「日本人」として自分をおしだしてきた人間、に対する今日からの批判はむろんあり得る。しかし、そのような生き方を同胞である朝鮮人は否定、批判しえても、異国人、侵略者たる私たちが、どのような顔と声をもって批判し得ようか」と述べた後、小林勝はこう告白する。「私は、小説やエッセイを書いた際に、決して、安易に「懐しい」などと書いてはならないあの頃の人々を思い出す。あれきりで、大邱公立中学校から姿を消した崔氏を思いだす³⁹⁾。」〔傍点原文〕

しかし、その男、梅原圭一は、大邱中学校を去ってそのまま歴史の波間に消えていったのではなかった。かれは朝鮮の解放を満洲で迎え、日本名を捨て、朝鮮に戻ってその後の激動の歴史を生きた。おそらく、忘れようにも忘れ去ることのできない梅原圭一の屈辱や怒りをうちにかかえ、ひた隠しにしながら。もしその男が、大邱中学校から消えておわりだったのなら、小林勝が人生の最終盤であえて自身の過去の作品「日本人中学校」に

言及することもなかっただろう。

エッセイは核心部分に入っていく。小説家という職業のため、電話上で名乗られてもだれなのかなかなか思い出せないような同窓生から思いがけない電話がかかってくることもある、という小林勝は、つぎのように打ち明ける。

小学校、中学校——それは、植民地にあった。私は苦痛なのである。しかし、相手は、「懐しい」といって電話してくる。本当にそう思っているから電話するのだろうし、私は「懐しい」という感情の、決して「懐しく」あってはならぬその対極から、その「懐しさ」をうちこわしまったく新しい握手をしなければならぬその道をさがしとめつつ書いているのだから、電話をうける気持は複雑である。

——君はどんな小説を書いていたか、と相手が言った。

——いろいろとね、私が言った、梅原先生を追い出してしまった話も書いたよ。

——梅原先生？ と相手は言い、そして事もなげにこう言った、ああ、今の外務大臣ね、韓国の崔外務部長官ね。

この言葉は、まさに正確に私の心臓を撃った⁴⁰⁾。

こうして、植民地の日本人中学校から失意のうちに姿を消した青年梅原圭一は、世界大戦と植民地解放の時代を越え、民族分断の大動乱をも越え、30年の歳月を経て、大韓民国外務部長官崔圭夏となって小林勝の前に突如あらわれ、その心臓を撃ち抜いた。崔圭夏は、もちろん大邱中学校での事件についてはなにも語らない。かわりにかれは、日本の関係に向かって、つぎのような儀礼的な言葉をかけるのである——「韓日間の国交が正常化してから五年にもならない期間のうちに、両国の政府と国民の間の相互理解および協力関係が多くの発展を相次いでもたらしていることを嬉しく思っているところであります⁴¹⁾。」

小林勝は、かつて梅原圭一の心を引き裂いた植

民地支配者の一人として、その内面奥深くを凝視せざるをえないような歴史的立場にあった。のみならず、かれはいまや反共を国是とする大韓民国と原理的に対立する共産主義者でもあった。つぎのような言葉で、エッセイはしめくくられる。

私が、直接この小説に書いた事件にかかわっていたのではなかった。しかし、かつて「植民地」朝鮮で、そのような無数の事件のつみ重なりがあって、そして、その一つで心を真二つに裂かれたであろう人間がいて、その人が、現在の日本政府を友とする外交辞令とはまったくちがう日本人観を心の奥底におそらく持っているだろう外務大臣である、そして、その人は、日本の戦後二十五年を生きてきた私と今や真向から対立するイデオロギーの持ち主であろう、というような複雑に幾重にも屈折する事実を、私は、「日本および日本人にとって、朝鮮および朝鮮人とは何か」を考えていくそのページの上にもいま重いペンによってつけ加えねばならないのである⁴²⁾。

しかし、小林勝がこう書いた時点で、かれの死は目前に迫り、「日本および日本人にとって、朝鮮および朝鮮人とは何か」を問うその生の記録は、あまりにも多くの未完部分を残したまま、すでに最終ページに至っていた。

大統領時代まで10年以上仕えた秘書官が、激昂する姿をほとんどみたことがない、と証言しているほど温厚な性格の持ち主だった崔圭夏が、教壇を蹴倒してまで示した若き日の怒りには、どのような心情が反映されていたのだろうか。まるで大勢で寄ってかかって小動物をじわじわと追いつめいたぶるかのような日本人生徒たちの嘲りの視線を一身に浴びた梅原圭一は、朝鮮に乗りこんできた植民者の息子たちの精神の底知れぬ不気味さに戦慄したであろう。小説中の「はくが、君たちに、何かしたかね……」という梅原健太のつぶやきには、崔圭夏が全身で受け止めたであろう祖国朝鮮にいながらも逃れようのない孤立感と、帝国の位

階秩序のなかで生きてきたみずからの生の土台が崩れていくような絶望感が凝縮されているように思われる。

崔圭夏にとっては、家族に支えられ、貧窮や差別に耐えながらようやく手にした教職であった。2年も経たぬうちに辞めるなどとは思っていなかったにちがいない。英語力を有する人材が不足していた米軍政下の韓国において、大学教員をしばし務めた後軍政府で官吏をしていた崔圭夏は、引き抜かれる形で外務部に入ることとなった。その意味で、その後外交官の道を一徹に歩むようになったことにも、社会変動期の一種の偶然が強く作用している。大統領にまでなってしまったのはアクシデントだったにしても、外務部長官や國務総理を歴任した以上、相当な社会的成功者だったことは確かである。ただ、そのような栄達の夢は、若いときにかれ自身が思い描いたものだったかどうかはわからない。あくまでも想像にすぎないが、堅実な性格の持ち主だったことから、子供たちに英語を教えながら暮らしていこう、などと考えていたように思われなくもない。エッセイで、「私は思いだしてしまう。いま生きているのか、と思う。なぜなら、一九五〇年にはじまる朝鮮戦争が、そこにはさまっているから」と書いた小林勝も、小説「日本人中学校」を発表した1957年の時点では、満洲に消えた梅原圭一の未来像を、漠然とそのように想像していたのかもしれない⁴³⁾。しかしじつは、この小説が発表されたまさにその年、崔圭夏は駐日韓国代表部参事官として、東京に赴任していたのである。小林勝には、小説のモデルとなった男がまさか同じ都市にいるなどとは想像もできなかっただろう。

崔圭夏が大邱中学校で受けた程度の侮辱は、数えきれないほどの朝鮮人が植民地支配下で日常的に受けてきたことであろう。小林勝は、植民地で起きた「無数の事件のつみ重なり」のひとつによって「心を真二つに裂かれたであろう人間」の、歴史と時代から忘れ去られ、本人も語ることのないその傷跡をみつめ、小説という形で結晶化させた。それは、日本の統治は朝鮮を近代化したか奪棄し

たかといった大きな議論からはみえてこない、その現場を実際に生きた人間一人一人の尊厳に対するおそれのまなざしであった。またこの小説は、結果的に、大韓民国で権力者となった一人の「親日派」の過去を暴いた。

生前の出版は叶わなかった小説集『朝鮮・明治五十二年』のあとがきで、小林勝はつぎのように述べている。かれが亡くなったのは、この本の最終校正を済ませた直後だったという。「この小説集の中には、朝鮮に長く住み、朝鮮人に直接暴力的有形の加害を加えず、親しい朝鮮人の友人を多く持ち、平和で平凡な家庭生活をいとんだ、もしくは、いとなもうとした日本人が登場してくる。かつて、下積みの、平凡な日本人の多くがそうだったと思う。それらの人々、あるいはいま中年に達した、それらの人々の子供たちの多くが、二十数年をへだてた今、朝鮮を懐しがっていることも知っている。」〔傍点原文〕こう前置きした上で、かれは厳然に宣言した。

しかし、私は私自身にあっては、私の内なる懐しさを拒否する。平凡、平和で無害な存在であったかのように見える「外見」をその存在の根元にさかのぼって拒否する。ことは過去としてうつろい去ったのでは決してないのである。敗戦によって、あれらの歴史と生活が断絶されたのでも決してない⁴⁴⁾。

なぜ「内なる懐しさを拒否する」のかという問いに対する答えのうちには、大邱中学校での忌まわしい過去をかかえて30年の歳月を生きてきた崔圭夏も含まれていただろう。崔圭夏が存在は、小林勝にとって、植民地の歴史と植民者の生活が過去のものとなったのではないということのひとつの厳然たる証であった。小林勝が歴史の連続性を叫んでやまなかったのは、植民地支配に起因する苦しみを今なおかかえつづけている朝鮮人（韓国人）が日本にも朝鮮半島にも数多く実在するという、そしてはかならぬ日本人がその苦しみに今なお関係しているということ、戦後日本での

諸経験を通してかれが悟ったからであった。「敗戦によって、あれらの歴史と生活が断絶されたのでも決してない」——小林勝のこの言葉は、金石範「虚無譚」の語り手の在日朝鮮人が植民者二世のFに向かっていった「もっと断絶せよと、いや、断絶しようと私はいいたい」という言葉を思い出させる。

ところで、「平凡、平和で無害」な植民者など存在しえず、子供もその例外ではないという小林勝の考え方は、1959年7月に発表された、植民地朝鮮の記憶をめぐるエッセイでもすでに表明されていた。「私は子供だったのだから、ということは弁解にならない。私は多分、朝鮮人たちにとって無害だったろう、ということもまた何の弁解にもならない。アメリカの軍人の中にもいい人間がいる、と試みてみたところで、彼がまぎれもなくアメリカの軍隊を構成している一員で、日本に存在しているという事実の前には、それは何ほどの意味もないことと同一である。歴史とはつまりそういうもので、私が子供で、無害だったとしても、一人だけ、日本帝国主義と植民地の歴史から除外されるわけにはいかない。歴史とはそういうきびしいものだ、それくらい重いものだ、そして私をふくめて全日本人はこの歴史を体の一番深いところで背負ってゆかねばならない⁴⁵⁾。」

小林勝がこの文章を書いた年の3月、すでに日本にいた崔圭夏は、駐日韓国代表部公使に昇進する。一方の小林勝は、このエッセイを発表した直後、朝鮮戦争時の「火焰嶺事件」で実刑判決を受けて下獄。かれが中野刑務所で懲役刑に服していた9月、崔圭夏は外務部次官となるべく本国に戻った。12月、小林勝は、いよいよはじまった「帰国事業」の熱狂の様子を伝えるラジオ放送に、宇都宮刑務所のなかで聞き入っていた⁴⁶⁾。かれが出獄した翌1960年、日本では日米安全保障条約更新に対する大規模な反対運動が展開されるが、韓国では「4・19革命」が起り、李承晩政権が打倒される。しかしつづく61年、朴正熙による「5・16クーデター」が引き起こされ、韓国はふたたび激動期に突入していくこととなる。

1959年に帰国した崔圭夏は順調に出世していき、67年、ついに外務部長官となる。一方、早すぎる晩年を迎えた小林勝は、1971年3月23日、さまよい出るかのように自宅から姿を消した。そして25日の夕刻、ある場所で、朽ち果てるように倒れ、搬送先の病院で死んだ。桜はまだ咲きそうにない寒い夜だったという。「懐しい」という感情の、決して「懐しく」あってはならぬその対極から、その「懐しさ」をうちこわしまったく新しい握手をしなければならぬ——新しい日本人に生まれ変わり、新しい朝鮮人と握手を交わすことを夢みて生きた小林勝の戦後は、出生地朝鮮に帰る道が閉ざされた1945年の夏にはじまり、71年の春におわった。かれが死んだ年の6月、崔圭夏は外務部長官を辞し、大統領外交担当特別補佐官となった。朝鮮が解放された後、二人が相まみえることはなかった。

6. おわりに——「ひらかれた場所へ」

高史明は、小林勝の死後、かれの生き方を評して、「日本人として、深く朝鮮を愛し、朝鮮をたんに懐しむことを拒否した」といい、植民地朝鮮で暮らしたことのある日本人が、朝鮮を愛することと「たんに懐しむこと」とをはっきりと分けた⁴⁷⁾。このことに関して、歴史学者の梶村秀樹は、朝鮮の風土や文化をなつかしむ旧在朝日本人の心情は「生身の朝鮮人の苦しみにあえてふれようとせぬ」抽象的な愛であり、それは「本質的に侮蔑と折り合える「愛」である、ときびしく喝破した⁴⁸⁾。人間へのまなごしの欠落した植民地の風物への愛情は人間に対する侮蔑と紙一重である、というこの指摘は、「朝鮮に長く住み、朝鮮人に直接暴力的有形の加害を加えず、親しい朝鮮人の友人を多く持ち、平和で平凡な家庭生活をいとなんだ、もしくは、いとなもうとした日本人」〔傍点原文〕たちにとって心外かもしれないが、やはり至当であると思う。

さて、金石範は、その文学活動の全体にわたっ

て特別な土地でありつづけている濟州島を、複雑な思いをこめて「原風景」と呼んだ。そのかれが、「私は私自身にあっては、私の内なる懐しさを拒否する」という小林勝の言明に目をとめ、つぎのように指摘していることに注目せずにはいられない。「小林勝はここで「郷愁」とか「ノスタルジヤ」とはいわず、「懐しさ」といつているが、それはことばを選んだ結果だと思われる。作中では登場人物が、朝鮮を故郷だというくだりがかなり出てくるのだから、「郷愁」といつてもよさそうなものだが、「二十数年をへだてた今」、小林勝はあえてそのようなことばを使わなかった⁴⁹⁾。」

このように金石範は、似たような単語を選択する上での些事に思われなくもない部分に強い反応を示している。「心情としては一種のノスタルジヤ以外の何ものでもない」「故郷」朝鮮への愛情を表現するのに、小林勝はなぜ「郷愁」や「ノスタルジヤ」ではなく、あえて「懐しさ」という語を選んだのか、と金石範は問う。そしてこの問いは、かれ自身の「故郷」への思いとつながっていく。別のところで金石範は、「故郷」濟州島について、つぎのように語る。

ことばを詰めていえば、「私の原風景は故郷」というふうになるのだが、これは「郷愁」にも似てかなり湿っぽく、それに陳腐な感じがする。しかし、じっさいの私のなかの「故郷」はそのような情緒的なものではない。それは青く光る漢拏山の雪のような刃を私に突きつけるものであり、現実の濟州島との繋がりのないままのイデーのようなものになってしまっているのである。私の「濟州島」はいまやどこか別の空間に棲息する架空の「故郷」であろう。「故郷」は私の存在と作品のイメージの核をなすものでありながら、現実には私は故郷喪失者である⁵⁰⁾。

解放後に金石範の「故郷」濟州島で猛威を振った凄惨な暴力が、その地を「情緒的」に想起する可能性をかれから奪い尽くした。濟州島は、今も

なお鮮血を流しつづけることをもって、やすらかな「郷愁」とともに回想されることを峻拒しつづける。それは、朝鮮戦争、そして日本国内で一向にやまない朝鮮人迫害を目のあたりにして憤怒に震えた小林勝が、みずからのうちに息づく「故郷」朝鮮への「郷愁」をなんとしても封じこめなければならなかったことと通じ合う。その意味で、小林勝の朝鮮もまた「イデー」であった。金石範は、「故郷」と自身の文学の関係について、このようにいう。「もし私が済州島に生まれ、そこで長らく住み幸福な生活の月日を送ったとすれば、「故郷」が私にとって保証されたものであったとすれば、私はおそらく済州島にこれほど執着しなかったかも知れないし、私の作品は生まれなかったのではないかと思う³¹⁾。」

一方、小林勝にとっても、「故郷」はけっして保証されたものではなかった。朝鮮が故郷だと思ふことが特權的に保証されていた植民者二世としてのかれの生は、日本の敗戦によって一応のおわりを告げた。しかし、植民地が消滅したからといって、かれがなにもなしに植民者であることから降りられたのではなかった。小林勝は、戦後もなおみずからが植民者であるということに終止符を打つために、ほかのどの文学者よりも強く朝鮮に執着し、同時にみずからの植民地郷愁を撃ちつづけた。

金石範は小林勝論の結論部分で、「〈朝鮮〉にがんじがらめになり、そのおのれの内に下降しつづける彼がどうして〈故郷〉に対する「郷愁」を持ちえようか」と問いつつ、小林勝の文学の可能性についてつぎのように述べる。

彼の拒否、しかしこれは彼を束縛するが、同時にまた彼をひらかれた場所へ、ほんとうの自由へみちびくものに他ならない。その〈朝鮮〉から自らを解放する過程が小林勝の自由であった。これは単なる「贖罪」ではない。「贖罪」を突き抜けたところにある広がり朝鮮人と共有する道であり、その方法としての「内なる懐しさを拒否する」意志が読者を、そ

して朝鮮人の私をも照らす³²⁾。

このようにして照らされた朝鮮人は、ひとり金石範だけではなかった。高史明は、自身や小林勝のような朝鮮と日本の若者たちがそれぞれに青春をなげうった朝鮮戦争時の日本共産党の「武装闘争」を、「人間としての根本における誤り」だったと反省した上で、「だが、それは純粹に朝鮮を愛した小林勝の心とは、決して一緒にしてはならないものであろう」として、つぎのように語る。

あの時代において、小林勝のように朝鮮を考えてくれた作家が、いったい何人いたであろう。わたしは、この小林勝の姿を思うのである。そして、この小林勝が、朝鮮の山野を、朝鮮人とともに駆けまわる姿を思うのである。その小林勝の姿は、満身創痍である。しかし、そこにひらかれた日本人の姿を見る思いがするのである³³⁾。

高史明は「ひらかれた日本人」といい、金石範は「ひらかれた場所」といった。「私は私自身にあっては、私の内なる懐しさを拒否する」と宣言した小林勝は、逆説的にも、むしろその「束縛」そのものを通して、閉ざされた場所から抜け出そうとした。「植民地後」の世界で、小林勝がみずからの植民地郷愁を撃つ苦しみのなかでなろうとしていた「ひらかれた日本人」とはどのような者で、かれが目指した「ひらかれた場所」とはどのような場所なのか、そして読者のあなたは果たして今そこにいるか——今もなお、小林勝の文学が投げかけるのは、この問いにほかならない。「贖罪」を突き抜けたところにある広がりを朝鮮人と共有する道」を歩き抜いた「ひらかれた日本人」が、「ひらかれた場所」——「ほんとうの自由」に到達するまで、かれの文学は問いかけることをやめない。

※ 本稿は、하라 유스케 (2012) 「고바야시 마사루와 최규하」[사이] 12호, 국제한국문학문화학회をも

とにして執筆した。

注

- 1) 津田 [1985:222].
- 2) 林淑美「解説——『記憶の糸』と『資料さがし』」
藤森 [2013:313-314].
- 3) 藤森 [2013:49].
- 4) 李 [1971:86].
- 5) 朴 [1971:50-51].
- 6) 愛沢 [1973:42].
- 7) 渡邊一民「解説」楳山 [2007:225].
- 8) 崔 [2014:92].
- 9) 朴裕河「おきざりにされた植民地・帝国後体験」伊
豫谷 [2014:70-77].
- 10) 金石範「虚無譚」 [1973:305-308].
- 11) 磯貝 [1981:61].
- 12) 安部 [1997:87].
- 13) 小林 [1971 ①:22]. 脱字を訂正した。
- 14) 大邱中学校については、稲葉 [2007]をおもに参照
した。
- 15) 古川 [2007:128]. 朝鮮で「創氏改名」がはじま
った1940年に入学した小林勝は、「私の中学の同級
生には三人の朝鮮人がいたが、その三人がどうい
う本来の姓名をもっていたのか、今、私はわから
ないのである」と回想している(小林[1961 ①:6]).
- 16) 森崎 [2006:88].
- 17) 稲葉 [2007:13].
- 18) 小林「曠星」 [1976:268].
- 19) 日野 [2009:56-57].
- 20) 小林 [1957:37].
- 21) 小林 [1957:40].
- 22) 田中 [2010:187].
- 23) 元亨常「崔 大統領の 幼年時節과 나」原州國民學
校開校八十年年史編纂委員会 [1987:162].
- 24) 金明珪「私心 없는 行政家」현석최규하대통령팔순
기념문헌집발간위원회 [1998:376].
- 25) 崔興洵「평생 정당에 가입한 적 없는 직업 공무원」
현석최규하대통령팔순기념문헌집발간위원회
[1998:392-393].
- 26) 稲葉 [2001:191].
- 27) 강준식 [2011:210-211].
- 28) 池 [2002:136].
- 29) 金明珪 [1998:378].
- 30) 권영민 [2008:29-30].
- 31) 권영민 [2008:102].
- 32) 姜、玄武岩 [2010:56-58].
- 33) 稲葉 [2007:10-11].
- 34) 小林 [1957:40].
- 35) 小林 [1971 ①:23].
- 36) 小林 [1957:40-41].

- 37) 小林 [1957:41].
- 38) 池 [2002:135].
- 39) 小林 [1971 ①:24].
- 40) 小林 [1971 ①:24].
- 41) 한영구, 윤덕민 역음 (2003) 「최규하 의무부장관
의 양국관계 일반 및 국제정세에 관한 발언
(1970.7.23, 서울)」『현대한일관계자료집 1』 도서
출판 오름, p.258.
- 42) 小林 [1971 ①:25].
- 43) 小林 [1971 ①:23].
- 44) 小林 [1971 ②:219-220].
- 45) 小林 [1959:80-81].
- 46) 小林 [1961 ②:131].
- 47) 高 [1976:75].
- 48) 梶村 [1992:237-238].
- 49) 金石範 (1976) 「解説——『懐しさ』を拒否するも
の」小林 [1976:372].
- 50) 金石範 [2001:228].
- 51) 金石範 [2001:229-230].
- 52) 金石範「解説」小林 [1976:378].
- 53) 高 [1976:74].

参照文献

- 愛沢革 (1973) 「想像力の基点としての〈朝鮮〉」『新日
本文学』11月号.
- 安部公房 (1997) 『安部公房全集』4巻、新潮社.
- 李恢成 (1971) 「憤怒の人」『新日本文学』7月号.
- 磯貝治良 (1981) 「朝鮮体験の光と影——小林勝の文学
をめぐって」『新日本文学』10月号.
- 稲葉継雄 (2001) 『旧韓国~朝鮮の日本人教員』九州大
学出版会.
- 稲葉継雄 (2007) 「大邱中学校について」『九州大学大
学院教育学研究紀要』10巻.
- 伊豫谷登士翁ほか編 (2014) 『「帰郷」の物語 / 「移動」
の語り』平凡社.
- 梶村秀樹 (1992) 『梶村秀樹著作集』1巻、明石書店.
- 楳山季之 (2007) 『旗譜・李朝残影』岩波現代文庫.
- 姜尚中ほか (2010) 『大日本・満州帝国の遺産』講談
社.
- 金石範 (1973) 『鴉の死』講談社文庫.
- 金石範 (2001) 『新編「在日」の思想』講談社文芸文
庫.
- 高史明 (1976) 「小林勝を思う」『季刊三千里』5号.
- 小林勝 (1957) 「日本人中学校」『文学界』2月号.
- 小林勝 (1959) 「体の底のイメージ」『新日本文学』6月
号.
- 小林勝 (1961) 「日本文学と朝鮮」『アジア・アフリカ
通信』3号.
- 小林勝 (1961) 「檻の中の記録」至誠堂.

- 小林勝 (1971) 「『懐しい』と書いてはならぬ」『朝鮮文学』11号、新興書房。
- 小林勝 (1971) 『朝鮮・明治五十二年』新興書房。
- 小林勝 (1976) 『小林勝作品集』5巻、白川書院。
- 田中明 (2010) 『遠ざかる韓国』晩聲社。
- 池東旭 (2002) 『韓国大統領列伝』中公新書。
- 崔真碩 (2014) 『朝鮮人はあなたに呼びかけている』彩流社。
- 津田海太郎 (1985) 『物語・日本人の占領』朝日選書。
- 朴元俊 (1971) 「小林勝氏の急逝を悼む」『朝鮮研究』4月号。
- 日野啓三 (2009) 『台風の眼』講談社文芸文庫。
- 藤森節子 (2013) 『少女たちの植民地』平凡社ライブラリー。
- 古川昭 (2007) 『大邱の日本人』ふるかわ海自事務所。
- 森崎和江 (2006) 『慶州は母の呼び声』洋泉社。
- 강준식 (2011) 『대통령 이야기』 예스위켄。
- 권영민 (2008) 『자네 출세했네』 현문미디어。
- 原州國民學校開校八十年年史編纂委員會 編 (1987) 『開校八十年史』原州國民學校同窓會。
- 윤덕민 編 (2003) 『현대 한일관계 자료집 1』 도서출판 오름。
- 현석 編 (1998) 『최규하대통령 팔순 기념 문헌집 발간 위원회 編 (1998) 『玄石片貌』 최규하전직대통령 비서실。